



〳 戦後70年 〵

石川県社会教育協会副会長 勝木育夫

私達が県立小松中学校（旧制）に入学したのは1942年で既に太平洋戦争ははじまっており、真珠湾やシンガポール・フィリピン等で戦果を挙げていました。私達は軍事的な教育で、お国のために戦うのだと思い込んでいました。だが、まともな授業は二年生までで、三年生になったら勤労働員で小松飛行場の測量、格納庫や誘導路の建設（いずれも木製で）、石切場を倉庫にするために石屑を掘り出すなど、もっぱら土工として働き、その後は小松製作所（現在のコマツ）で飛行機のブレーキを作っていた時に終戦になりました。

石川県は空襲も受けず、食糧もそれほど逼迫してはいなかったのですが、機雷の投下等があったとはいえ比較的のんびりしていましたが、地理、歴史は一切教えてもらえず、大企業は解体されて進路は随分制限されていました。でも、戦後原爆を知り、細菌兵器が研究されていたことも知り、大都市が京都や金沢など一部を除いて軒並みに空爆を受け、市民は火の海の中を逃げまどったことも知りました。特に原爆の悲惨さは言葉では言い尽くせないものであり、決して人道的には許されないもので、また第二次大戦以後は決して軍人だけでなく、非戦闘的な人々や子供にまで被害が及ぶもので、決して戦争をしてはならないものと強く思っています。

しかし、冷静になって見ると、上司から例えば細菌兵器の研究を命じられた時、それを拒否できるだろうかと考えますと、当時の雰囲気では「非国民だ、国賊だ」とされて、まともに生きて行けるか自信がありません。原発などもミサイル攻撃を受けたら福島事故どころではありません。憲法学者が何人も憲法違反を指摘しているのに、集団安全保障の法案を早急に決めようとするのは納得が出来ません。十分な説明と言っていますが国民の多くは不安の方が強いと思います。

教育の力はすごいと思います。私などはすっかり国のために死を覚悟して疑わなかったものです。イスラムの過激派が爆薬を持って自爆することも理解出来ます。それだけに自由な教育の大切さがよく解ります。

私達は終戦時には未だ中学生だったので戦争の加害者としての意識はありませんでした。でも、外地で戦っている人の中には中国などの住民を殺せと命じられた人もあり、誰もが贖罪の念や、戦争を強く憎む思いを持っているそうです。家庭では良き夫、父、息子を人間性を麻痺させられ平然と兵隊になってしまったのが実際です。戦後すぐの頃は若者こそが国を立て直し、文化国家を作るんだという気持ちが満ちていましたが、世の中が落ち着くと共に如何に効

率よく立ち回って行くかの方に重点が移ったようにさえ思われてきます。流れに身を任せて「なるようになれ！」と言っていると、取り返しのつかないことになりかねないと危惧するものです。

戦後の混乱期にそれまでの歴史認識や社会のルールが大幅に変わらなければならず、食糧難もあり、混乱状態の中で、社会教育をしっかりとしなければといち早く協会を設立された方々の英断に深く敬意を表します。私は1956年に小松に帰り社会教育なんて露ほどの意識もなかったのですが、小松市中央公民館の厚生委員の一員に加えて頂いて、子供会や青年団に人形芝居やレコードコンサート等で、音楽の解説などをしたのが社会教育活動の始まりでした。小松市社会教育協会の設立が1980年、先輩に導かれながら活動を続けている内にいつの間にか会長にと言うことで、県協会の役員になってしまい、先輩各位の豊富な経験を学んでいる次第です。

この間に社会も随分変わり、あれほど命の大切を刻みこまれたのに、簡単に人を殺したり、自分の命を絶ったりする事件が増え、平気で放火したりすることが毎日のように知らされると、「どうなっているんだ！」と云う気がします。社会教育が益々大切になって来ているようで、若い人を勧誘し、県内の交流を深めて行けたらと考えます。